

## 一瞬消えた二酸化炭素

・火山の噴煙で植物の活動が鈍る・・・

昨年の冷夏と今年の記録的な猛暑、ヨーロッパの洪水と異常気象が続いているが、地球の温暖化の力ぎを握っている二酸化炭素(炭酸ガス)の増加にも異変がでている。

地球がますます熱くなるという地球温暖化は、石炭や石油を燃やした時にでる二酸化炭素が空気に増えて、その「温室効果」で気温が上昇することである。このまま推移すれば二十世紀末には地球全体の平均気温が三度前後上昇し、札幌が鹿児島気候になるとの予測もある。

一酸化炭素は空気中に二万分の四程度含まれ、この微量ガスが温室効果には絶大な役割を果たす。石炭石油の燃やす量の増加とともに二酸化炭素が敏感に増え続けて、連続観測が開始されて四十年ほどになるが毎年〇・四%の割合で順調に増えていた。ところが三年前から突然伸びが止まってしまった。それも日本やハワイなど北半球規模である。この間に石油石炭を燃やすのを止めてしまったわけではないので、空気中に放出された二酸化炭素がどこかに忽然と消えてしまったことなる。海に吸収されたのだろうか。消えた二酸化炭素の行方の「ミステリー」の鍵を握っているのが、三年前に大噴火をしたフィリピンのピナツボ火山であることは、研究者の間では一致している。

一つの有力なシナリオはこうである。ピナ

ツボ火山の大噴火で吹き上げられた噴煙が上空に漂い、太陽の光を遮る日傘効果で北半球が冷えた。気温に敏感な植物の活動が鈍り、呼吸で出す二酸化炭素の量が減ってしまった。海への吸収はあまり変わらず、出の部分で減って石油石炭の燃焼から増える部分と相殺されて、合計で増加が止まった。森林が寒むさで呼吸や活動を控えた結果というシナリオである。

ピナツボ火山噴火から三年。その影響は薄れて一休みした二酸化炭素の増加が間もなく上昇に転じ、来世紀末の破局に向かってさらに増加が進むと予想されている。